

家族の復権と農業、工業の調和

—— 戦後の都市と農村の関係の工業化がもたらした
食糧、家族、健康問題の変質 ——

1. 都市と農村の子供の口腔状態調査から
2. 都市と農村の食糧相互供給の変質
3. 食卓の商品化を許す工業社会の家族
4. 家族の復権と農業、工業の調和

丸 橋 賢*

要 約

都市の子供に比較し、農村の子供の口腔、視力等は想像以上に荒廃していることが調査の結果明らかとなった。さらに調査してみると、農村の食生活が混乱し、加工食品化が著しく進行していることもわかった。さらに食生活の混乱の背後には出稼ぎ等による家族の崩壊があることも明らかとなった。戦後の工業優先政策の結果、農村は経済的に存立基盤を失ったと言える。

農村の子供たちは都市の企業で製造された食品を多量に摂っているわけだが、その食品の品質は栄養学的に見て、生きものとしての人間が求めているものではなく、なっていることがわかる。農村の商店では、毒々しく着色され、防腐剤、人工甘味料等が多量に使用された漬物、清涼飲料水、ソーセージ等ばかり売られている。都市から農村に供給される食品の質は極めて悪い状態にある。一方、戦後の農業も激しく姿を変え、農業、化学肥料に頼る工業的な産業となってしまっている。農家は出荷用とは別に自家用作物を作り、出荷用は食べない傾向が強い。農村から都市に供給される食糧の質も悪化していることがわかる。

このような、商品化され、品質を優先することのない食品が現代の家庭の食卓に流入したのは、工業化した現代社会の家族の関係が便宜化してきたことと関係している。家族の間に深い信頼、愛情等の存在する家庭には、便宜的で安易な食品は入り込みにくい。家族のために尽くすことを喜びとする家庭では、食生活も手作りとなる傾向が強い。

医学者の立場から、日本民族の末永い健康な将来を考え、2つの提案をしたい。1つは家族の復権である。工業化した文化の流れから家族の一人ひとりを守る最も確かな防波堤は家庭である。2つめは、工業優先政策を見直し、工業と農業の調和を計ることである。目先の経済成長率が低下したとしても、長い目で見た健全な将来を選択すべきである。

1. 都市と農村の子供の口腔状態調査から 都市に比べ、農村の子供たちの歯科疾患（特にウ蝕…ムシバ）が非常に多いことに注目していた

* 丸橋歯科クリニック

私たちは、その実態と原因についての調査をおこなった。その結果、想像以上に農村の子供たちの口腔、全身が荒廃している事実が明らかになったが、その背景には商品化し、荒廃した食生活があることがわかった。しかしさらにその背景には食生活を荒廃に至らしめるような家族の崩壊があり、またさらにその基礎には、農村の存立基盤の崩壊があることが明らかとなった。一本の歯の崩壊を通して、いわば、病むいのち、病む食、病む家族、病む社会の構造を見せつけられることとなった。そこでまず調査の概要について示したい。

① 荒廃の極みにある口腔

私たちは調査の対象として、群馬県でも最も都市化の進んだ地区の一つと考えられる高崎市のN小学校と、群馬県内の純農村地区にあるS小学校の生徒を選んだ。まず非常に歯の良い子供と、非常に歯の悪い子供を選び出し、中間は捨てた。非常に歯の良い子供とは、軽度のウ蝕(C1)が2本程度までの子供とし、非常に歯の悪い子供とは全ての歯にウ蝕がある子供とした。高崎市のN小学校では、歯の良い子と悪い子は約同数ずつ選り出され、中間の子供が最も多かった。それに対し、農村のS小学校では歯の良い子はわずか2名にすぎず、ほとんどの子供は壊滅的に悪い状態であり、中間もそれほど多くはなかった。多くの子供たちが人間のものとは思われない口腔をしていたのである(図-1、図-2)。

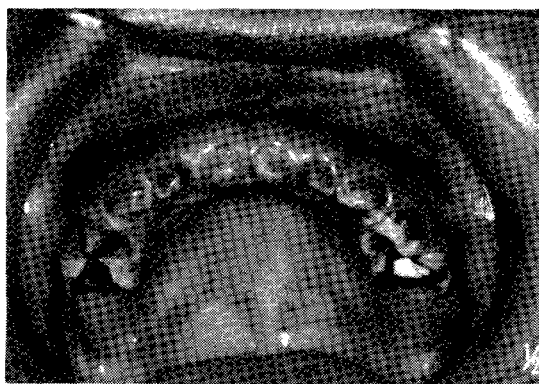


図-1 高崎市N小学校の、非常に歯の悪い子供



図-2 農村のS小学校の、非常に歯の悪い子供

(昭和58年度)

	3才児 う蝕罹患率	平均視力 1.0未満
高崎市 N小	48%	16%
農村 S小	88%	43%

図-3 高崎市N小学校と農村のS小学校の子供たちの健康調査結果

同時に私たちは両校の子供たちの視力を調査した。左右の視力が平均で1.0未満の子供がS小ではN小の何と3倍にのぼる。また両校区の3才児のウ蝕罹患率を見るとS小校区がN小校区の2倍となる(図-3)。S小の子供たちは元気に屋外で遊ぶ田舎の子供のイメージとはほど遠く、顔色は悪く、体格も脆弱で、問いかけに対する反応も消極的である。先生に聞いて見ると他校の子供たちに比べ、全ての面で反応がなく、給食も食べ残しが多いと言う。

歯のみではなく視力も農村の子供たちの方が悪いのはなぜか。一般に言われるように勉強のしすぎ、ファミコンのしすぎ、住居の狭さ等が近視の原因の主なファクターなら、高崎市のN市の子供たちの方が視力が悪いはずである。S小の子供の方が勉強はせず、高価なファミコンは持っていない。住んでいる家は広い。その原因を考えながら私たちはS小の子供たちの食生活を詳細に調べて

みた。

② 想像以上に多い加工食品の利用

歯が非常に良いと遊ばれた子供と非常に悪いと選ばれた子供全員に対して、私たちは次の項目について詳しく問診をした。

・主食(朝、昼、夕)・小魚・海藻・野菜(淡色野菜、緑黄色野菜)・肉類・魚介類・練り製品・大豆と大豆製品・乳製品・芋類・果物・缶詰・菓子類・嗜好品(コーヒー、紅茶、缶ジュース類)・インスタント食品(ラーメン、カレー)・偏食の有無
その問診結果の1例を図-4に示す。歯が非常に悪い10才の男子の食事内容である。朝は御飯、

昼は給食というパターンは他の子供にも多く見られるパターンであった。夜はうどんが多いと言うが、よく聞いてみると週に2回程は家族全員インスタントラーメンである。主食として、週に何回かインスタントラーメンを食べると言う家族はこの他にも多く認められた。うどんも乾めんが多い。おやつもアイスクリーム、缶ジュース、スナック菓子、菓子パン等であり、田舎であっても手作りのおやつはほとんどの子供が食べていない。ごはんにはデンプやフリカケをかけて食べると言う。その反面、海藻、野菜、小魚等、ミネラルやビタミン、繊維など必要な栄養素を補給する食物が非常に不足している。たった2名選ばれた非常に歯の良い子供は、悪い子供に比べ、甘い物の摂取が少なめであったが、他の部分では同じ傾向にあった。

全体的にみて、農村の子供たちは豊富にあるおいしい水を飲まずにジュース類を飲み、野菜も食べていない。ジュースといっても缶ジュースならまだ良い方で、多くは一本5~10円のビニールチューブ入りの砂糖水である。都市の子供も含め現代の子供たちは野菜を食べない傾向にあるが、どちらかと言うと農村の子供の方が野菜を食べないのは驚きであった。漬物は自家製のもの食べているかと思ったが、これも毒々しく着色された袋詰めのもの食べている家庭が多い。頼みの給食を調べると、ハンバーグをはじめ、加工食品を多く使用している。そのうえ野菜はほとんど食べ残す。

子供たちの食事の問診結果から、私たちは、農村の子供たちの病んだ口腔、病んだ身心の背後には病んだ食があることを理解した。想像に反し、新鮮な食品を食べていると思った農村では、都市の子供たちより多くの加工食品を摂っていたのである。また警戒感も持たずに、砂糖を多量に摂取していた。

なぜこのような食生活となるのか、私たちは子供たちの家族を調べてみてよく理解できた。この農村では出稼ぎが多く、父親が不在となっている家庭が多い。中には母親まで出稼ぎに行っている例もある。出稼ぎには出ないケースでも、ゴルフ

食生活問診表

K・H (10才・男) 視力 0.9 0.7

項目別内容	回数 (週に何回程度か)
主食— 白米 うどん インスタントラーメン	
小魚— 食べない	
海藻— 家ではほとんど料理に使わない	
野菜— { 淡色…炒めもの、サラダにして食べる { 緑黄色…ほとんど食べない	
肉— 焼肉の時は2人前・ウインナー・ソーセージ	時々
魚— さけ さんま さばなど	2~3/週
豆類— 納豆・豆腐を少量	2~3/週
牛乳— 給食の時だけ	
菓子類— { アイスクリーム { ジュース類	3~4/週 2/週

食生活の傾向 { 砂糖の摂取過剰
 { 植物性たん白の不足
 { カルシウム、ビタミンの不足
 { 加工食品が多い

食生活の問題点…父親がおらず、母親も出稼ぎで年に2回帰るくらいなので、祖母が孫の世話をしている為、食生活に対する配慮に欠ける。

図-4 農村のS小学校で、非常に歯の悪い子供の食生活

場のキャディ等に働きに出ている例がほとんどである。父親が不在となると食生活が間に合わせ的になる傾向は一般的であるが、ここでは長期の出稼ぎにより、家族の中心人物が不在で食事も混乱している。母親も働きに出ており、おじいさん、おばあさんが畑の仕事をまかされ、その間に子供たちの面倒を見ているのである。病む食の背後には、このように崩壊した家族があったのである。家族が崩壊するに至った理由は、戦後の日本の工業優先路線の中で、農村が見捨てられ、経済的に行き詰まり、存立基盤を失ったことである。病むいのちの背後には病む食があり、病む食の背後には病む家族、その背後には病む社会があったわけである。歯科医師として私たちがあの農村の子供たちを癒す道は、子供たちの歯を削って填めるのみではない。農村に安定した家族、安定した社会を取り戻してあげることが病める子供たちを救う本質的な道であろうと考えられる。

2. 都市と農村の食糧相互供給の変質

農村の子供たちの食事の問診から、現在の農村では都市以上に無警戒に加工食品を多く摂ることがわかった。農村において、商品としての食品を利用する態度は極めて安易なものである。子供のおやつは子供に金銭を与えておいて自分で買って食べさせるのが一般的である。畑に行けば野菜はあるのに、それを漬ける手間を省き、商店や農協の売店から毒々しく着色された袋詰めのものを買ってくる。インスタントラーメンの利用は極めて頻繁で、ソーセージやネギを入れて食事に代えている。多くの家庭でインスタントラーメンは箱で購入してある。驚いたのは農協の売店に野菜を売っていることである。畑に行けば沢山ある人参を、畑より店が近いので買いに来る人がいるのには驚かされる。それに少し手間をかければ食糧の多くを自給できるのに、手間を嫌って自家用の野菜も多種類は作らず、ニワトリ等も飼っていない。出荷用の商品としての作物のみを作り、野菜まで安易に買うことが多いのである。家族の解体したこのような農村の食卓に、商品としての食品

が主流となって流れ込んでいるのである。

商店や農協の売店を調べる中で、都市から農村に供給される商品化した食品の質が非常に劣悪であり、もはや食物とはいえないほどの品質であることも知らされた。図-5はS小学校の在る村の農協売店に陳列されている食品である。生きものとしての人間の生命が必要とする食物の概念からは、既にほど遠い内容のものばかりである。戦後、食品の生産や加工も工業化、商業化されたのは他の分野と同様であるが、その結果、現在、都市(企業)から供給される食品はコストダウンと利益追及を極度に追い求め、食物とは名ばかりのものになってしまったのである。

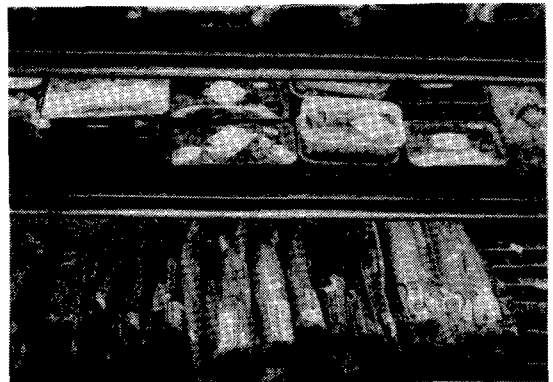


図-5 S小学校の近くにある店で売られている漬物と飲料水

私が大学生の時、友人の一人に漬物会社の子弟がいた。彼から聞いた「買った漬物は食べないほうがいいぞ。工場を見ていたらとても食べられるものではない。自分の家でも絶対にうちの会社の漬物は食べない。家で食べるのは別に漬けているんだ」という言葉を私は印象深く思い起こした。私は母から「買ったものは安心できない」と口ぐせのように聞かされて育った。そう言って母はいつも手をかけて作ったものを食べさせてくれた。昔の人間が有していたこのような鋭敏な生命感覚は非常に大切なものであったと思われる。

このように、生産、加工される食品の品質が激しく変わったのは、食品の生産、加工が工業化したために他ならない。昔は、例えば味噌や油、酒、茶などあらゆる食品は、その生産を家業とし、暖簾を大切にする“家族”によって生産されたものであった。戦後・能率と利潤を追及する工業化の過程で、非能率でコストの高いこのような“家業”は企業との競争に敗れ、隅に追いやられることとなったのである。

一方、工業化した社会は、都市（企業）が供給する食品の品質を劣悪なものに変質せしめたのみではない。反対に農村が生産する農産物の品質をも同様に劣悪なものにしたのである。その現状を象徴的に語れば、現在の農家は出荷する農産物を自分たちでは食べることをしない。食べられないものであることを知っているからである。自家用は堆肥を施し、農薬をあまり使わず、別に作っているのである。私は農村で生れ、育ったが、戦後の農業が辿った道を肌身で感じてきた。私は昭和19年生れである。中学校を昭和35年に卒業したが、この時期は戦争に敗れた日本が朝鮮戦争特需によって急速に経済発展の基礎を固め、高度経済成長政策を推進していた時期であった。まだ進学者の少なかった当時の農村の級友の多くは中学校を卒業すると都会の工場へ就職していった。私が高等学校在学の頃、優秀な生徒の多くは理工系を希望し、工学部の入学志願者倍率は非常に高かった。反面、最も低倍率で入学しやすかったのは農学部であった。これは工業優先の高度成長政策を象徴する現象であったのである。私は農村が都市に労

働力を吸収されて行く過程をまざまざと見てきたわけだが、その結果農村に残る青年が急減し、ついには後継者を失う農家が目立つようになったのである。

労働力が不足する事態となった農村に急激に浸透したのが農耕機械、化学肥料、農薬であった。少ない労働力で能率を上げるためにはこれらが不可欠であったし、工業化した社会の要請としても、これ等の工業製品を農村に買ってもらいたかったのである。機械化に反比例して牛や馬等の家畜が減り、厩肥ができず、肥料も化学肥料に頼ることとなる。このようにして、昭和45年頃になると工業製品に頼った工業的な農業がすっかり一般化したのである。私が幼い頃は、畑や水田に化学肥料や農薬を撒くことは極めて少なかった。それでも立派な作物が沢山でき、品評会には大きな大根や白菜が並んでいたものである。

このような農業の工業化が、農産物の品質を大きく変えたのは当然のことである。かじっただけで香りが部屋中に漂い、味わい深いキュウリは消え、ガリガリと硬いのみで味も香りもないキュウリが一般的となった。本物のキュウリを味わって育った私には現在店で買うキュウリはまずくて食べられない。自分でも作ったり、有機農業の青年から買って食べたりしている。キュウリの栽培の実態を図-6に示すが、20回以上の消毒が行われ、病気が発生すると一日に3回消毒薬を散布することもあるのである。

このように工業化し、薬漬け栽培によって、土は死の土となり、農産物は形ばかりで、内容が悪く、残留農薬によって危険の多いものとなっている。農家が自家用を全く別に栽培するのは当然であるが、このような農産物が出荷され、農村から都市へと供給されているのである。

都市と農村はお互いに、自分では食べることのないものを生産し、商品として供給しあっているわけだが、これは工業社会の本質を示すものと私は考えている。このような食糧事情の変化が、近年におけるガンやアレルギー等の急増に示される健康問題に深く関与していることは疑いのないところである。

〔キュウリ夏秋栽培計画〕

* キュウリ標準防除計画

ダコニール水和剤	ビスダイセン水和剤
トリアジン水和剤	ダイファー水和剤
メルクデランK水和剤	ドイツボルドーA水和剤
コサイド水和剤	ミルカーブ液剤
モレスタン水和剤	ダイシストン粒剤
マラソン乳剤	サイアノックス乳剤

以上の標準防除計画の他、次のような消毒がおこなわれる。

○土壌消毒に対して

ピクリン剤 EDB油 サンヒューム

○苗立枯病に対して

オーソサイド水和剤 バシタック水和剤 タチガレン液

○立枯性疫病に対して

バンツイル乳剤

○タネバエ、ダニに対して

エスセブン粉剤 シュアサイド粉剤 アカール乳剤

除草剤はハウス栽培ではあまり用いられないが、露路栽培ではグラモキソンを年三回使用する。

○施肥（10アール当り）

堆肥	3000 kg	} (化学肥料)
発酵ケイフン	400 kg	
キュウリ配合	600 kg	
BMヨーリン	80 kg	
顆粒苦土石灰	80 kg	
OKF-2	80 kg	
液肥2号	100 kg	

年20回以上の消毒が行われている。

図-6 キュウリ栽培の実際

3. 食卓の商品化を許す工業社会の家族

農村における家族の崩壊と、そこに忍び込んだ食生活の崩壊については先に述べたが、都市部における家族も社会の工業化とともに変貌を遂げてきている。農村の家族に起きたことと、都市の家族に起きたことは本質的には同じものである。基本的には農耕定住民族で、家業を全員で支えて成立していた家族共同体が、工業化の波に寸断され、各家族が別々な企業で働くようになって、生活目的の共同性が失われたのである。私は昔の家族の写真を見ると、現代の家族の写真との大きな違い

を感じさせられる。昔の家族は全員が同じ方向をきちんと向き、しかも視線はまっすぐで、目がしっかりしている。それはその時代の家族間の関係の密度の高さを示しているように思われる。昔の家族は農家が最も多かったわけだが、その他も酒屋、鍛冶屋、染物屋等の家業を持ち、家族全員でその家業を支えていた。おじいさん、おばあさんお父さん、お母さんから子供まで、それぞれの役割を持ち、家業の繁栄を願って働いていたのである。家族は常に一緒の場所で働き、生活目的も家内安全、家業繁栄という点で共同のものであった。家業を中心としたこのような家族間の絆は、生産様式の工業化にともなって急激に寸断されたのである。現代の家族の写真を見るとそれがわかる。あるいは公園等で一緒にいる家族の表情にもそれは見てとれる。父親と母親は別々な方向に目をやり、何か考えながらタバコを吸っていたりする。子供は近くの売店で買い与えられた菓子を食べながら勝手に遊んでいる。父親はA会社、母親はB会社に勤務し、子供は学校、塾、遊び仲間の方に心を向け、家族がそれぞれ別な方向に関心を向けている結果、このような情景となるのであろう。父親が会社で昇進することは母親にとって経済的に嬉しいことであるが、それ以上の喜びではない。別々な関心と目的を持った人間が、便宜的に同じ家に住んでいるのである。このような便宜的関係によって結ばれている家族の間には安易な食品が容易に入り込むのである。それぞれ別な方向に関心を持った表情の父親と母親が遊ばせている子供は必ず、買い与えられたおやつを食べている情景はまさにそれを象徴するものである。

現代の都市生活者の家族の多くは、上記の如く、それぞれが別々な生活目的を持ち、便宜的に同じ家に住んでいる。それぞれが自分の部屋（世界）に住み、各自の生活目的、リズムに合わせて別々な時間に別々な食事をとる。ちょうどホテル暮らしのような家族となり、彼らが住む家は、家屋という建築物を意味し、昔の日本の“家”の内容をほとんど残すものではない。

このような家族関係の変質は夫婦の間にも親子の間にもはっきりと認められる。実は、この家

族関係の工業化の過程で、人間が本来持っていた生命感覚や願い、要するに人間性を忘れてきたのではないかと私は思っている。企業の目的に代表される工業社会が要求する目的を自己固有の目的であるかのように思い込み、本来持っていた幸福、充実、感動、信頼、家族の安定等を求める願いを見失い、眠らせてしまったのである。ここで私自身の母との関係をも検討しながら、私が育った時代の母と子の関係と現代のそれと、どのように変質してきたのか比較してみたい。

①子供の“犠牲”になることを嫌う母親の一般化
最近私の住んでいる所に近い或る小学校の水道が壊れ、給食が3日間停止することになった。その間弁当を持参させることになったが、お昼の時間になって先生が驚いたそうである。何人もの子供がカップラーメンを持ってきて、お湯をもらいに職員室の前に並んだというのである。多忙であったにしても、子供に食を与えるという最も基本的な任務を放棄する母親が増えているのである。断水の学校に、お湯の必要なカップラーメンを持たせる親の常識も疑わねばならないが、このような例に、現代の母親が子に向かう姿勢がよく現われていると思われる。

私の知人で幼稚園の理事長がいて、彼は子供の食事は母親が与えるのが最良と考え、給食をせず弁当を持参させているが、弁当を作るのが面倒なので彼の幼稚園に子供を入れたがらない母親が多いという話を聞いた。また、別な幼稚園の園長から、週1回のお母さん弁当日を作ろうという提案にさえ反対が多いので困るという話も聞かされた。高崎市では、ついに中学校まで給食となったが、それを陳情し、推進したのはお母さんたちである。このようにして、親が用意して子に与えるという、食の基本が失われたのである。このような食環境で育つ子供たちを待っているものは何なのであるか。それを示す或る印象的な場面に私は出会った。

尾瀬を歩き、山小屋前の広場で私は休んでいた。汗を拭き、あの尾瀬の美味しい水を感動して飲み、小休止していたのである。広場は遠足に来たらしい小学生たちで賑わっていたが、その子供たちの

状況を見て私は非常に違和感を覚えた。子供たちの多くがコーラや缶ジュースを飲んでいるのである。水を飲んでいない。尾瀬の水は素晴らしい水である。なぜ尾瀬まで来て子供たちは水を飲まず、缶ジュースを飲むのであろうか。また、子供たちが食べているおやつを見ると、全て買い与えられたスナック菓子ばかりである。親が作ったものを食べている子供は見当たらない。なぜ、私自身は尾瀬に来て水を飲むのか、それを考えて私はすぐに、子供たちが水を飲まない理由を理解できた。

私は育つ過程で、本物の水を飲み、多くの感動を覚えてきた。真夏に飲んだあの清水の冷たさ、父とイワナを釣った沢で飲んだあの香り高い水の美味しさ、それらが私の胸の内の核の部分にしっかりと残っていて、今でも水道のまずい水を飲みながら、いつも本物の水に対する飢えを感じているのであろう。だから尾瀬に行けばあの水を飲みたいと思う。

それに反し、あの子供たちは本物の水を飲んで育っていないのである。水道のまずい水で育っている。

私は幼時に本物体験をさせることの重要性を深く感じた。幼時に本物の水に対する感動を得ていないから、あの子供たちは水に対する渴望を持たないのであろう。ニセ物の水をまずいと思いながら飲んで育った人間が水を欲するはずがない。ニセ物で育った人間は、ニセ物を裁く原点を体内に持たないゆえに、所詮ジュースとは名ばかりの清涼飲料水を相対評価し、商品の間を漂流することになるのである。

私自身を省ると、水に関しても本物の水を知っているゆえにニセ物の水を簡単に裁くのであると思う。水道水を口に含むと「ウッ」と身体が拒否してしまう。水に限らず、野菜や豆腐、味噌等、何でも本物で育った私には、売られているそれらがまずくて食べられない。幼いとき食べたあのキュウリやトマトの味を知っていると、現在売られているものは形ばかりでニセ物に思われる。

また、尾瀬に遠足に来ていた子供たちが食べているものを見ても、母親が作ったものをほとんど食べていない。尾瀬に来て水を飲まない、あの子

供たちの不幸は、水ばかりでなく食べ物全体について本物の味を知らず、それゆえ食べ物を評価する絶対的な核を体内に持たず、ニセ物を裁くことができないまま、ニセ物の食品群の間をさまよう漂流者と化したことにある。本物体験によって形成された核を体内に持たない人間が、人間らしい感受性や判断力を持つことは極めて困難である。

子供たちが、このように本物の味を失ったということは、子供たちに本物の食べ物を与えてくれる本物の親を失ったということを物語っている。最近の多くの母親は子供は可愛いけれど、子供の犠牲になるのはいやだと思っている。そのようなことは非人間的であり民主主義に反するというような感覚を持っているようである。私は家族の関係で“犠牲”という言葉を用いることに抵抗を覚えてならない。自分を削っても相手にして上げる関係こそが家族の基本であったし、それを通して信頼や安定が保証されていたのである。特に母と子の関係で、母が身を削っても子に向かうことが否定されたとき、子供は身心ともに拠点を失うことになる。

最近の母親の子に向かうこのような姿勢は、子供の側にはっきりと受け止められている。子供たちに聞くと、お母さんのことは大好きだけれど、母親が年をとったとき犠牲になるのはいやだと答えている。新成人の意識調査を見ると、70%の新成人が親の面倒は見ないと答えている。反対に、親の70%は、子供のために自分たちが働いた財産を使うのはいやだと答えている。

②私の母に見る“昔の母親”

私は昭和19年に生まれた。日本が戦争に負けつつある最悪の時期である。母は8人兄弟の長男である父に嫁ぎ、おまけに祖父を43才で失い、父が家長として7人の弟妹の世話をしなければならない状況の中で私を育ててくれたのである。父母は教員をしていたが、時代が悪く、農村とは言え食糧が極めて不足していた。母が食事の仕度をする父の弟妹たちが食べてしまい、いつも母は空腹であったらしい。そのような中でまさに身を削って母は私を育ててくれたのを覚えている。乏しい

食事の中から、自分の分まで栄養のありそうなところを私に分け与えてくれた。それを喜んで食べてしまったことを思うと、今でも私は胸が痛む。小学校に勤めていて、6kmの道を走るようにして通い、帰りには袋に道草をいっぱい取ってかっいできては山羊にやり、その乳を私に吞ませてくれた。疲れた身体で、夜はまた編み物、縫い物をして着せてくれたのである。

私の母ばかりでなく、あの時代の周囲の母親は皆同様であったと記憶している。いつもまっすぐに子供に向かい、子供を守ってくれた。従って、私の級友を見ても、親を見捨てるような人は一人も見当たらない。私自身も、母が倒れたとき、徹夜の看病をしながら、どうしても母に助かってもらいたいと念じたものである。徹夜がいやだなどは少しも感じることはなかった。母がそれ以上のことをしてくれたのであるから当然の反応であると思われる。

戦後社会の急激な工業化は、前述のごとく、家族の工業化とも言うべき便宜的な家族関係を生み出した。この便宜的な家族関係に便宜的な食品が入り込んできたことも述べた。その影響下に癌、肝硬変、アレルギー、歯周病、ウ蝕等、生活由来性疾患が急増してきたのである。そのような現代人の荒廃した身心の状況については、私の別の報告を参考文献として挙げ、省略する。

4. 家族の復権と農業、工業の調和

最後に、まとめとして、工業社会がもたらした現在の食糧、家族、健康の状況に対し多少の提案をして稿を閉じたい。

第一は、工業優先の政策を変更し、農業と工業の調和をはかることである。民族の末永い安定、健康を考えるならば、目先の能率と利益のみを追求して、工業化を優先することは慎むべきである。それは近い将来における日本農業の壊滅を引き起こし、日本民族の存立基盤を危ういものとするであろう。輸入食品への依存は長距離輸送のための乾燥、消毒の影響を受け、栄養、安全性に大きな問題がある。また工業優先により、農村の家族の

一層の崩壊が進むことも不幸なことである。工業のみに頼る社会に安定した文化を育てることも困難である。経済成長率の低下を覚悟しても、私は農業と工業の調和した社会へと徐々に方向を転換すべき限度に来ていると思う。そのような方向への国民のコンセンサスを形成し、政策に力を及ぼすべきであろう。

第二は、解体した家族関係の回復を計り、工業社会が要求する目的に追われ、忘れてきた人間的な願いや充実、安定、信頼等を生活目標の本質的な部分として復権させることである。これにより、必然的に食や健康の問題も方向転換するはずである。このような家族の復権とは実に容易に果たせるものであり、その具体例を示したい。

私が主宰する「良い歯の会」は既に約2万人が受講したが、これを受講したS氏家族は次のように変化していった。最初はS氏の奥さんが受講し、次に子供を連れて参加した。その影響を受け、奥さんは食品の手作りに興味を持つようになった。今は味噌も家族全員で作ると言う。多忙な会社勤めの御主人も日曜日には手伝ってくれると言う。そのようにして、味噌を作ると食事の時、一年中食べ物の話題を中心に話がはずむらしい。最近、奥さんは手作り石ケンの講師になって新聞に載っていたが、手作りに凝り始めてから楽しくて仕方がないという。健康になったこと、食事がおいしくて楽しみになったこと、家族が味に敏感になったこと、食べ物を大切にするようになったこと、短い食事の団らんが楽しくなったこと…等をS氏は良い変化として挙げていた。奥さんは手作りに凝り、時間がなくなって今まで勤めていたパートを辞めた。「その分、収入は減りましたが、今の方がずっとリッチです」と話す奥さんの笑顔を見て、私は揺らぐことのない「家族」のあたたかさを感じた。このような家族に支えられ、豊富な本物体験によって育まれた原点を体内に持つ人間が育つであろう。このようにして形成された確かな人格と、家族こそ、現代に対峙し得る基本的な橋頭堡であり、また新しい文化を形成する地道な基本単位なのである。

文 献 一 覧

丸橋 賢

- 1983a 「真の癒し人の像を求めて」「歯界展望」61巻3号, pp. 531-539。4号, pp. 763-774。
- 1983b 「食生態と口腔の健康」「歯界展望」62巻6号, pp. 1189-1196。
- 1984a 「いま農村の子の体が危ない」「現代農業」63巻4号, pp. 34-39。
- 1984b 「癒しの思想」柏樹社。
- 1984-85 「農村のんびとの体はなぜ病んでいるか①~⑧」「現代農業」8号, pp. 110-115。9号, pp. 130-136。10号, pp. 92-96。11号, pp. 76-81。12号, pp. 134-137。64巻1号, pp. 90-93。2号, pp. 54-57。4号, pp. 82-87。
- 1985a 「歯科診療室から」「土と健康」14巻1号, pp. 12-15。
- 1985b 「歯科医学にとって市民権とはなにか」「歯界展望」65巻5号, pp. 1009-1016。7号, pp. 1425-1434。
- 1986 「病む生命・病む社会・病む自然の病根は一つ」「土と健康」15巻4号, pp. 12-18。
- 1987 「いのちを癒す」「いのちを未来へ」現代書館, pp. 69-104。

PROBLEMS ON HEALTH, FOOD, FAMILY IN A CITY AND AN
AGRICULTURAL DISTRICT UNDER MODERN INDUSTRIALIZED DAYS

Masaru Maruhashi *

* Maruhashi Dental Clinic

Comprehensive Urban Studies, No. 33, 1988, pp. 98-108

Children in an agricultural district, we found a lot of dental caries and myopia more than city. It seems to be concerned with diet in an agricultural district. We found that children have a lot of manufactured or instant foods, there. Probably, disjoint of family caused that situation.

Nowadays farm villages and cities supply un-healthy foods each other in an industrialized societies. This injures people's health. And popularly instant easy foods are taken in disjointed families.

As I am dentist, I desire people's health in future. To realize it, I would like to propose resurrection of family and have a policy which consider the balance between industry and agriculture.